

拾って、調べて・・・

姉妹が顔を見合わせる。

「千？（苦笑）」

「あ、いや。そういう邦画、あったでしょ」

そこで姉、「ああ、『千と千尋の』某ね」

妹が続けて、「今日からお前は千じゃ！」 ああ業平のヤツ。

「いやあ、河川敷走るの久しぶりだったんで、つい道草食っちゃって」

「ああご自慢のMTBで来ましたか」

「まあ、今日のところはMTじゃなくてRSだけだね。相変わらず元気そうで」

「お互い無事で何よりってところか」

「メートルの段差を挟んで、二年ぶりの再会を喜ぶ二人。業平は背が高い方なので、余計に見上げないといけなかったりする。

「頭がえらく高いぞ！」

「はいはい」

姉妹も近づいてくる。崖地をひと降りして一言。

「見目麗しいお二人さん！」

「千さん、この方は？」

蒼葉が訊ねる。

「会社にいた頃の同期で、本多・・・」

「業平橋の業平と書いてごうへいです」

本人が名乗り出る。ヤレヤレ。

「千住櫻さん、と妹の蒼葉さん」

「何か芸能人みたい。モデルさん？」

櫻は苦笑気味。蒼葉はそわそわした感じ。この展開っていったい？

「確かにこれはスクープもんだあね」

「起業ネタとか何とかで解決できないかねえ」

「そつさね」

男同士で会話が進み、今度は櫻が退屈そう。例の憂い顔になりかけていたが、千歳がそれを察知し、話を振る。

「櫻さん、いいものがあるって話、そろそろどうですか？」

「あ、そうそう・・・ジャーン！」

いつもの不敵な笑み？ いや「よくぞ聞いてくれました」とでも言いたげな満面の一笑である。

段差のふもとに置いてあった櫻のマイバッグ。そこから出てきたのはクリップボード。と思いきやそれは、「データカード？」一同、思わず発声。

さ「拾っただけじゃなくて、何がいくつあったかを調べようってことです」

ち「記録は大事。社会的意義もありそう」

さ「そつ。データを集めて分析して、ゴミにならない、ゴミを減らす、そんな対策を立てるのに一役買ったそうで・・・」

こ「メーカーにいた人間としては頭が痛いところ」

あ「世界共通なんだ」

さ「多少違和感あるかも知れないけど、世界的な取り組みとあらば、また違つてしょ？ ね、千歳さん」

眼鏡越しに視線が光ったような気がしたのは気のせいかな。対照的に裸眼の妹は目をパチクリさせている。この場所でクリーンアップすることを思いついた、つまり発起人は確かに千歳だが、主導権的には櫻に分がある。感服しつつも、一応号令をかける。「成る程。同じクリーンアップでも、これをする事で説得力が増す訳だ。やりましょう！」（モノログ的にも欠かせないしね。）

「じゃ、まずは除去！ ここに集めましょ。数えるのはそれから」崖に近い平面とにかくゴミを固めることにした。千歳が拾い上げていた大袋は、白黒そろっていたので、大まかに可燃・不燃で分けるのには好都合。時刻は十時半、干潟はさつきよりもさらに広がった感じ。櫻はまたポイポイやる構えだったが、妹のお出かけ着への配慮か、持参の大きめレジ袋に放り込むスタイルで歩き回っている。四人とも軍手着用&レジ袋片手。それぞれ思い思いに歩き、拾ってはレジ袋にポイ、そして集積場所でガサガサと出す。これの繰り返しである。単調なようだが、時に巣穴からグレー（泥一色）のカニが出てきて、

「わあ、櫻姉、今度はカニい！」

「カニ？ に、にしんの缶詰・・・」

「つて、しりとりじゃなくて、本当にいるんだよう」

「あ、本当だ。可愛いじゃん」

てなことがあったり、

「なあ、千ちゃん。このテレカ、まだ使えんじゃない？」

「確かにゼロのところは穴開いてないね」

「ま、ケータイ持っても、いざという時は公衆電話だったりするから・・・」

「あれ、そこに落ちてるのってケータイ？」

「これだもんね。一応届ける？」

「って言うか、販売店に持って行ってレアメタル回収してもらわないと」

「さすが元電機メーカー、生産プロセスセクション！」

「どつでもいいけど、千ちゃんてのはやめて」

といった具合。決して単調という訳でもない。

退潮はまだ続く。上流の方も少しずつ干潟が出てきた。「ありや、ハンガーか？」折れ

たヨシの茎に、針金式の黒ハンガーがいくつか引っかかっているのを見て取れる。「うまくかかったもんだ」男二人、露わになったばかりの干潟をそろそろと歩いていく。すると、

「カー」と鳴き声一喝。一羽のガラスが着地するや、巧みにハンガーを啜え、すかさず飛び去って行った。下流側で眺めていた姉妹も啞然。

「今の見た？」

「そつか巢作りのシーズンか」

まだ数本残っていたが、ガラスに襲撃されるのも不本意だ。浮かない顔で集積場所に引き返す二人に、櫻がニヤリ。

さ「ガラスに横取りされちゃいましたね」

ご「ガツクリです。データカードに何て記録しよう」

あ「ガラスの基準では生活雑貨でしょうね」

ち「いや、単におもちゃだったりして。ま、有効に使ってもらえるなら、ハンガーも本望？」

四人そろったところでひと休み。パツと見は結構片付いた感じである。ガラスを特訓すれば、ゴミの分別も可能(?)なんて話をしていたら、おもむるにタバコを取り出し、点火する

一人の男。業平、禁煙したんじゃない？」

千歳が声を上げるのと同調するように、姉妹も「アッ！」「面食らった業平君は、最初の煙をひと吐きしたかしないかのうちに、啜えた一本をその場に落としてしまった。「いや、これは失敬」垂直に落ちたタバコは干潟の水分によって消火され、プスとくすぶる。念のため、バケツの水もひとかけ。

「まだ吸ってたの？」

「いや拾っている中で吸殻を見つけたら、ついその」

「これは漂着じゃなくて、散乱ゴミね」

「あ、一応、携帯灰皿持ってるんで」申し訳なさそうに落とした吸殻を拾い、灰皿に収める。まだ長さがあるので、無理やり突っ込む感じ。

「もったいなかったねえ」

「以後、気を付けます」

「本多さん、罰として、干潟一周！」

蒼葉の不意の一言に一同大笑い。カラスは去ったが、近くの水辺ではカモが騒々しく、こつちに合わせて嘲笑しているように聞こえる。姿は見えないが、結構な数がいるようだ。

「それにしても、皆さんそろってタバコとは無縁なんだねえ。肩身が狭い」

「そ。この場合の無縁は、煙がない方の無煙ね。煙とは縁がない方がよくてよ」

さすがは櫻姉。今日も冴えてる。

ち「街では分煙や路上禁煙が進んできたけど、こつした河川敷や干潟はまだまだ喫煙者優位な訳だから、逆に配慮が必要ってもんだ」

「トホホだねえ。でもごもつとも。恐縮です」

あ「では、ここでは原則禁煙ってことで」

気を取り直して、もうひと集め。十一時になった。いよいよデータ記録作業である。

「櫻さん、ここからの手順は？」

「燃える・燃えないでいたい分かれているから、そこからさらに仲間分けしてみましようか」

「業平は吸殻見るとまた一服したくなるだろうから、不燃の方だな」

「そつか、吸殻つて可燃でいいんだ」

「地元自治体のルールではね。でもデータカード上はそついう分類じゃないんですね」

「え？ あ、そうです。発生源別つてことなんで。タバコは『陸』つまり日常生活系の

欄にある『吸殻・フィルター』にチェックします」

「私、不燃！ お姉様は干様と」

「千住さんも干だと思っただけど・・・」

「いいからいいから。フフ」

妹のさりげない気遣い(?)が嬉しい櫻だった。

漂着ヨシに紛れた細かいゴミは見送ったが、フタやキャップの類、吸殻、発泡スチロール片など、拾えるものはできるだけ集めたため、分けるのも数えるのも、それなりに時間がかかりそつな予感。仲間分けが済んだところで、十一時十五分になろうとしていた。

「蒼葉、お友達との待ち合わせ時間、大丈夫？」

「あ、十一時には終わるって思つてたから、つい」

「正午に渋谷でしょ。後はいいわよ」

姉と違い、妹君はケータイ所持者だった。折りよくそのお友達から着信があった模様。「あ、

ちよつと失礼」 そそと上流側へ。さっきのカラスが舞い戻って来たが、今度は静かだ。女性には威嚇しないらしい。

あ「駅に着いたけど、なんか埼京線、遅れてるみたいだから、彼女も遅くなりそうだって。でもポチポチ行くね」

ち「どうもありがとう。気を付けてね」

あ「ハイー！」

軍手と袋を置いて、一礼。軽々と段差が上がっていく。姉よりも長身な彼女の後姿は、確かにモデルのように映る。走る必要がなくなったためか、悠然と歩いて行った。千歳も業平も何となく目で追っている。

さ「バタバタと失礼しました。まあ、いつもあんな感じですよ」

ち「調べ終わるところまでいらっしやれなくて残念でしたね」

さ「放っておいても、また来ると思います。気に入ったみたいだし」

三人になったところで、お待ちかねのカウント作業へ。タバコの吸殻は思いがけず、五本程度だった。

「やっぱり皆吸わなくなったんだよ」

「いや、携帯灰皿が普及してポイ捨てしなくなったんだ」

「まあまあお二人さん、そういう議論は数え終わってからってことで」

この日の集計結果は、ワースト1：プラスチックの袋・破片/六十三、ワースト2：食品の包装・容器類/四十九、ワースト3：フタ・キャップ/四十四、ワースト4：農業用以外の袋類（レジ袋など）/三十六、といったところ。思いがけなかったのは、エアコンのホースと思しき配管被覆や、電線ケーブルのカバー類が散在していたこと。被覆としてまとめて数えると、実に三十三に上った。ワースト5にランクインである。

「業平、これどうよっ」

「これまた製造物責任が問われそうな・・・」

「銅線が抜き取られてるってのは、最近のドキュメンタリーで聞く話と同じってか？」

「ウーン」

櫻が促す。

「ここはまた千さんにブログで知らしめてもらいましょー！」

「櫻さんまで、千さんて」

「電線だけに、線さんかなあって。あ、すみません。千歳さん」

業平が割って入る。「すみま千てか？」一同失笑。櫻の影響力、大したものである。あ

とは、発泡スチロール片（サイコロ大以上）が二十九、ペットボトル（またはプラスチック

ボトル)が二十四・・・と続く。バーベキューの名残と言えるカセットボンベ、季節的には早い蚊取り線香の金属フタ、川を見ながらスカツとしたかったのか髭剃りセット(シェービングフォームのスプレー缶とシェーバーのケース)ほか、傘の取っ手、スポンジ、靴下などなど。それぞれデジカメで撮っていく。データカードが呼び水になり、前回以上により細かくゴミ事情が見えてきた。例の大袋の他に土嚢袋も三枚、この手の大型ゴミの処理が悩ましいところだったが、とにかく畳んで四十五リットル袋に押し込んだ。拡がっているから目に付くし、生態にも影響が出る訳だ。しっかり片付ければスッキリするものである。しりとり  
の具となった品々、物議を醸したノコギリも分別して袋入り。洗って再資源化できそうな容器類は、拾った数の三分の二程度か。水道で洗いながら、業平が申し出てくれた。「大型ス  
ーパーが途中にあるから、帰りがけに出しとくよ。干潟一周よりも実用的でいいだろ?」頼  
もしい限りである。そんなこんなで四十五リットル袋は、またしても五枚全てを消化。

「櫻さん、ゴミ袋って余ってたりします?」

「今日拾った大袋、また使いましょうか?」

「ああ、しまった」

「いえいえ、そこまでは。次回持って来ますよ」

「業平は?」

「ウーン」彼はよく唸る。何か考え事をしているようである。

「いや、カウントするのにもっと手っ取り早い方法ないかなあって」

「早くも発明ネタ探しかね?」

「この範囲でこういう状態ってことは、他の大がかりなクリーンアップ会場だともっと数えるの大変な訳っしょ?」

二人のやりとりを聞きながら、櫻の視線は鈍く光るある物体を捉えた。販売店に持って行くからと、まだ袋入りしていなかった漂着ケータイが半乾きで寝そべっている。

「私、実現性はわからないけど、ケータイ画面でピピとかやって数を入れていけると面白  
いかなあ、って今・・・」

業平と千歳は虚を衝かれたようにお互いを見る。

「そつか。データカードの項目を入力画面にして、数字を打ち込めるようにすれば集計は  
楽になる、か」

「ケータイ不所持人間としては、何ともコメントしようがないけど、PCでも理屈は同じ  
だから、モデルとしてはアリだね。特に一つの会場で複数班が手分けして調べる場合、って  
ことかな」

「蒼葉はさておき、今日会ってる友達が多分その辺、詳しいと思う」

「オレはどっちかって言うと実機派だから、バーチャルな仕掛けはどこまでできるかわからないけど、仕様は考えてみるよ。それをその人に見てもらえばいい訳だ」

思いがけず、話が大きくなってきた。入力した値がリアルタイムでブログに反映したり、なんてのも面白そうだ。

「そろそろ乾いてきたかしら？」

「じゃ、業平君。あとは頼むよ」

「今日は変な天気だけど、ちょうど日が照ってたんだ。こういう活動は天も味方してくれる訳？」

スーパーで回収可能と思しきペットボトル、食品トレイの類を四十五リットル袋に放り込んで、RSB（リバーサイドバイク？）に括り付ける業平。

「これでアルミ缶満載だと、また違う展開になるんだよな」

「どっちにしてもお似合いだよ」

「へへ、じゃまた！」

櫻がキャッシュカードを落とした橋からは、この干潟は目視可能。人がいればそれもわかる。日曜の朝の塾帰り、一人の女子中学生が三人の様子を眺めていた。「あの人たち、何してるんだろ？」 どうもゴミを拾っているだけではなさそうなのはわかったが、その意図がわからない。「水道で何か洗ってる。はあ？」 動作を目で追いつつも、ボンヤリ。いつしか十五分くらい経っていた。「あ、もうお昼だ！」 どこで誰が見ているかなんてのはわからないものである。

目撃者は立ち去り、時刻はすでに正午近くになっていた。ひととおりの作業を終えたところで、千歳は大事なことを思い出す。「片付け終わった後の写真！」 櫻も後を追う。「あ、千さん、待って」

少しずつ水位が戻りつつあった。

「間に合った」

「これで川の神様もお喜びね」と櫻がポツリ。一瞬何のことかと思ったが、そこは千さん。

「ああ、おクサレ様を助ける話。『佳き哉』ってなかなかの名セリフでした。姿は見えないけど、どこかにいらっしやるんでしょ？」

「今、飛んで行きましたよ」 櫻が指差す。

「あー」

どこからともなく、ツバメが現れ、二人の前を横切り上昇していった。

「これでワハハとか聞こえたら、間違いなく本物」

「フフ」

青葉、ツバメ、そして水ぬるむ匂い・・・今日は立夏である。

© røndi ogger